

脇 長生先生の心霊講座から抜粋

霊魂の世界と人間の世界.....人生にとって現幽交通は有意義 (1)

霊魂不滅の意義

一般にいう“霊魂不滅”という意味は、ただ“霊魂”が不滅というだけではなく、人間の死後は、一人の例外もなく霊界で生き通す.....言い換えれば、永遠に人間の個性は死後も存続する、ということなのである。

心霊科学はこれを明瞭に実証している。すなわち、理論的にも、いろいろな科学的実験によっても証明し、また、もちろん、世間に心霊事実（偶発的心霊現象*）がおきることから認められる事実も多いことから理解される。これらを科学的に調査して、多角的に霊魂の不滅を証拠だてる作業をこの学問は地道に行っているのである。

*偶発的心霊現象：全く突発的に発生し、見方によっては幻覚、錯覚という範疇に入れられる、いわゆる不思議な現象と見なされるもので、幽霊現象、幽霊屋敷、幽霊写真、火の玉、夢、人格転換、災難・変事等の心霊現象が含まれている。

心霊研究は物質科学をどう観る

“人間は死なない”という類の、人間そのものの大問題、人生における重大問題を、心霊科学は「死なぬ」と結論しているが、それでは、“人間は死によって、すべては滅びる”、“無”となってしまうと主張する物質科学を人々はどう見ているのであろう。

今日の学問の対象が、あくまで現象であり、物質というものを総てとしており、一般の人たちはその学問を“絶対”であると信じ、大多数の学者たちもこの物質科学をもって、自然科学の総てだと信じ切っている。

これに対して、心霊科学は、その対象を「心霊現象」とはいうものの、物そのものの本質であって、現象の奥といえる「超物質」を研究している。たとえば、この宇宙についても、ただ物質一元の宇宙ではない、その奥には「超物質の世界」があることを認めている。物質科学者は未だこのことに気づいていない。したがって、一般の人たちにとっては知る由もないわけである。あるいは、これは少数の人が認めていたとしても、一般の人たちは取り合わない。その結果、この物質の世界こそが宇宙の全部であると信じ切っているのが実情なのである。

一方、われわれスピリチュアリストの立場からみると今日の科学が誤っていると主張するかと言えば、そういうことにはならない。なぜならば、それは物質の科学であって、いまにその研究は超物質の世界にまで進められることは間違いのないことだと確信しているからである。これは時間の問題である。（編集部注：現在、とくに英国では量子論等

によって超微子の世界、すなわち超物質界の研究へ迫っている)

すなわち、今日の科学は、その真理探求はまだ終着駅までは進んでいない。その過程にある。そうしたことに、多くの学者、そして一般の人たちは気づいていないのである。そうした未知なる世界こそが超物質の世界であり、霊魂の世界でもある。この世界を「内面の世界」と言う方が哲学的に判り易いかも知れない。

ところで、現代科学は物質科学であると言ったが、近ごろの物理学者も化学者も、その実は「内面の世界」をひたすら解明することに意をそそいでいると言ってよい。引力、磁力、電力、放射能、光、熱等々で、ただの一つとして内面の世界のものでないものはないからである。

英国の心霊科学者フィンドレイ の言葉で表現すると、「現代科学が独り一時的の物質のみに注意を集中し、永遠性の心・精神を無視したことは確かに誤謬である。科学が、その態度を改め、精神第一、物質第二主義を執るようにならないかぎり、到底宇宙の真相を把握できる気遣いはないであろう」ということになる。

とにもかくにも、われわれにとって、もっとも大切なことは、われわれの「心」「精神」である。心が存在するから、宇宙が、われらの宇宙として意識されるのである。もちろん、われわれの心は、間断なく、その境地を更える。最初の一瞬間は物質的地上にとどまり、それから順次に、超現象的霊魂界への階段を際限なく昇って行く。しかも、それらは皆、永遠の心の刹那的居住地でしかないのである。

要するに、現代の人類は、次第次第に宇宙の観念を変えつつあるのである。これは、物質科学、心霊科学の発達にしたがって、新しい認識、情報の獲得の結果によるのである。そして、今後われわれの心が進展するにしたがって、そうした証拠資料はますます増大することは、言うまでもない。(つづく)